



グローバルゼーション下2010年代ザクセン州にみる 中等教育カリキュラム構成・開発の調査・研究：ド レスデン市ならびにドレスデン近郊におけるギムナ ジウム教科「芸術」を事例として

鈴木， 幹雄

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 10(2):187-197

(Issue Date)

2017-03-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0041238>



グローバル化下2010年代ザクセン州にみる中等教育カリキュラム構成・開発の調査・研究 —ドレスデン市ならびにドレスデン近郊におけるギムナジウム教科「芸術」を事例として—

Research into the German Curriculum of Art Education in the 2010s under the globalization in Dresden and the areas near Dresden

鈴木 幹雄*

Mikio SUZUKI*

要約：本論では、現代グローバル化の下での中等教育カリキュラム構成・開発について、ドレスデン市、同市近郊のギムナジウムの現代表現教育を事例として調査、研究した。当該地域は、厳しい社会・経済状況の下、教育の再興に取り組んでいる地域であり、他方また、具象芸術の伝統を残した上で、同時に近年の約25年間抽象表現台頭の著しい地域である。その意味でわが国芸術教育界にとり、興味深い分析対象になると考えた。

だが、一国、一都市の教育界の深層を把握することは簡単ではなく、以下の研究アプローチを重ね合わせることにした。一つには、同州のカリキュラムを取り上げ、カリキュラムにみるこの間約十五年間の教育課題と教育構想を分析すること。第二には、現地の先進学校事情、教育事情に詳しい教師の紹介の下、意欲的な教師による挑戦的な授業実践を調査・研究すること。第三には、ドイツにおける芸術教育学と芸術界の動態研究の理解を重ね合わせることにした。

はじめに

1) 2015年1月17-30日、安東恭一郎氏が共同研究「美術デジタル教科書の利活用における現状と課題」の研究代表者を務める共同科研の第2年度調査の一環で、ドイツ、ザクセン州におけるカリキュラム（レールプラン）調査を行った。1月という厳寒の中ではあったが、ドレスデン市とデトモルト市でドイツ表現教育現況調査を行った¹⁾。本論では、未だ未解明点が多い中で、幾らか輪郭の出てきたドレスデン市近郊の芸術教育を取り上げ、同地域現況調査の報告・研究を行いたい。

調査・研究を行ったのはドレスデン市ならびにドレスデン近郊ギムナジウムで、代表的な数校における教科「芸術 Kunst」を事例に、グローバル化の下、ドイツにおける現代表現教育の模索がどのように行われているか、関心を持った。とりわけ同地は、厳しい社会・経済状況の中にもありながらも教育の再興に取り組んでいる地域であり、他方また、具象芸術の伝統を残しながらも約25年間抽象表現台頭の著しい地域である。わが国の芸術教育を考える上で、興味深い示唆を与えてくれると推定された。しかもまた同地、ザクセン州のカリキュラム（レールプラン）は、次世代の育成に誠実に取り組もうとする息吹と配慮を感じさせてくれた²⁾。

2) しかし、一国、あるいは一大都市の芸術教育の全体像を把握することは思いのほか難しく、本研究・調査では、次の研究アプローチをとることとした。一つには、カリキュラムを文献とし

て取り上げ、カリキュラムにみるこの間約十五年間の教育課題と取り組み姿勢を分析すること。第二には、現地の先進学校事情、教師事情に詳しい指導的教師に訪問校の選択・依頼を頼み、授業の概況を観察すること。第三には、ドイツにおける芸術教育学と芸術界の動態研究の理解を重ね合わせ、視野に入れること。

上記三つの諸相を重ね合わせることによって、これ迄わが国の表現教育関係者、表現教育研究者が見ることができにくかった実情の一端がいくらかなりとも構造的な解明ができれば、と考えた。

1. 教科「芸術」のカリキュラムにみる現代的芸術観の基本的特徴

(1) 前文に見るカリキュラムの基本的命題

同州ギムナジウム教科「芸術」のレールプランでは、カリキュラムの基本的考え方は以下のように要約できる。

視点1：「教科、芸術においては、生徒達の分化した知覚能力が強化され、発展させられる。

創造性、表現能力と連想能力、表象能力と鑑賞能力は豊かに鼓舞され、探求され、促進される。この教科は、開かれた形で、そしてまた複合的な形で、芸術の誕生、効果、並びに芸術を自らのものに獲得することについての知識を伝えてくれる。この知識は、様々な生活領域に翻案することができる。

芸術的活動は、生徒達に、全ての感覚をもって現実を再三再四新たに体験し、理解し、それに関わることを可能にしてくれる。

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授

(2016年9月30日 受付)
(2016年10月31日 受理)

そのことによって、教科、芸術は、生徒達の総体的な人格発達とアイデンティティの発見に対して大きく影響を与える。」³⁾

視点2:「学校生活の全ての領域にとって、教科、芸術はインパルスを与える。この教科は、公衆のなかにある学校のイメージを本質的に特徴づける。

伝統と近代的なものとの間の緊張の場の中で、生徒達は自国の文化や他国の文化と、或いは国際的な芸術、自国の、ないしは地域の文化的記念碑、芸術家、更には芸術的な出来事と格闘する。」⁴⁾

視点3:「教科、芸術は、美術コンピテンツ Bildkompetenz を育て、同時にまたコミュニケーション・コンピテンツやメディア・コンピテンツを育てる上で非常に重要な意味を有している。

美術コンピテンツは、生徒達が内容と形式の統一としての美術を感覚的、情動的、並びに合理的なコンピテンツと協同して、コミュニケーションのメディアとして活用することを可能にしてくれる。そのことによって、この教科は、生徒達の価値追求に特別な形で貢献する。…」⁵⁾

(2) 学ぶことを学ぶ

ザクセン州ギムナジウムの芸術教科カリキュラムでは、「ギムナジウムの目標と課題」の直後に、同カリキュラムの基底をなしている考え方を明示している。「学ぶことを学ぶ Lernen lernen」という命題がそれで、次のように説明されている。

「学習コンピテンツの発達は、学ぶことを学ぶを目標にしている。学習過程を自立的にプランし、構造化し、監視し、場合によっては修正し、最終的には評価することが理解されている。学習コンピテンツには、動機付けのコンピテンツとして、学習への自らの関心、並びに自分自身の学びを強化することが属している。」
 「生徒達は、自己責任的に、学習コンピテンツ促進というコンセプトを発展させ、これらを学校組織や授業の中で実現させる。／持続的な有効性を維持する為には、学習プロセスそれ自身が教授対象にならねばならない。専門の内容に結びついて、授業時間の一部が学ぶことを学ぶことに捧げられねばならない。カリキュラムはその為に、端緒点、そして刺激を与えてくれる。」⁶⁾

(3) ザクセン州芸術教科カリキュラムにみる基本的視点とその特徴

ギムナジウムの芸術教科カリキュラムでは、各学年段階で実現を目指す目標が学年段階毎に規定されている。今第5～10クラス学年を事例とすれば、次の通りである。

・第5クラス学年（日本の小学校5年生にあたる学年）の目標：「年間加重点テーマ「自然と芸術」と格闘することによって、生徒達は、芸術的表現とあらゆる形式における生活現実との関係がいかなるものかという点についての視点を獲得する。その際生徒達は、絵 Bild と模写との関係についての基本的な知識を獲得する。…」⁷⁾

・第6クラス学年の目標：「年間加重点テーマである「色彩のヴァールール」と格闘することによって、生徒達は、造形表現の三次元に位置する造形表現手段、色彩と親しむことについての知識を深める。／生徒達は、色彩の体系についての知識を広げ、色彩知覚を分化させる中で自分自身の感受性を形造る praegen。…／生徒達は、様々なテクニックやメディアに取り組む中で、そしてまた様々な色彩効果を試し、判断する中で、諸々のコンピテンツ

を発展させる。生徒達は、自らの個人的な表現可能性や造形表現可能性をますます一層意識的に省察する。」⁸⁾

・第7学年クラスの目標：「年間加重点テーマである「明暗の豊かさ」に取り組む中で、生徒達は、明・暗、光と影という表現手段がいかに多様であるか、という自らの視点を広げる。生徒達は、それらの絵画芸術的な効果を体験し、試し、更には自らの判断能力と批判能力をより一層発展させる。」⁹⁾

・第8クラス学年（日本の中学校1年生にあたる学年）の目標：「年間加重点テーマである「空間の魅力」と格闘する中で、生徒達は、空間表現の様々な可能性やヴァリエーションがどのようにして存在するか、という事についての多様な視点を獲得する。生徒達は、彫刻という造形表現手段に親しむ中で、…平面、空間、動き、響き合い相互の緊張の場の中に、立体的－空間的造形表現の様々なテクニックや実制作がどのように存在しうかを経験的に知る。生徒達は、立体と空間という造形表現次元の中に、色彩と明暗がどのような意味を有しているか、ということについて自らの知識を拡大させる。…」¹⁰⁾

・第9クラス学年の目標：「「材料とテクニックへの挑戦」という年間加重点テーマと結びついて、生徒達は、造形表現の三次元に広がる様々な芸術上のテクニックや材料と実験的に親しむ中で、自らの教科の知識や能力を拡大させる。生徒達は、自分自身の絵画的制作を目指して偶然的方法を活用する。彼らは、芸術上のテクニックや材料と様々な格闘する中で、それらがどのような効果を持っているかということに関する知識を獲得し、深める。」¹¹⁾

・第10クラス学年（日本の高校1年生にあたる学年）の目標：「年間加重点テーマ「絵－動き－プロセス」と制作や鑑賞という形で格闘する中で、生徒達は芸術が複合的な課題解決プロセスであることを把握する。／…生徒達は、様々な歩みからなる、そしてまた多層からなる制作プロセスというコンテキストにおいて、諸々のテクニック、方法、メディア、実践に意識的に親しむ中で、諸能力を実をもったものとして自らのものに作る。／生徒達は他の人の作品に対して複合的に意見を表明し、筋の通った価値評価を行い、自らの立場を述べる事ができる。…」¹²⁾

2. ザクセン州ギムナジウム「芸術」教科カリキュラムにみる芸術教育学コンセプト

(1) 教科「芸術」の一般的目標

ザクセン州ギムナジウム教科「芸術」のレールプランでは、<「自然と芸術」－「色彩のヴァールール」－「明暗の豊かさ」－「空間の魅力」－「材料とテクニックの挑戦」－「絵 Bild ー動きープロセス」>、この一連の体験的・活動的理解・獲得を通して美術コンピテンツを自らの物に獲得することが目標とされている。

また同レールプランでは、教科の最終目標は以下のように規定されている。

「生徒達は以下の事柄を獲得し、又は発展させる。

- ・芸術的創造過程、並びに受容過程の独自性、ないしは複合性に造形的－実践的に親しむことについての知識と能力、
- ・造形芸術の個人的な表現可能性と造形表現可能性に親しむ中で形作られる美術コンピテンツ Bildkompetenz、
- ・芸術的メディア、テクニック、造形表現方法に親しむ中で形

作られるメディア・コンピテンツ、

- ・造形芸術と日常美学に親しむ中で形作られる判断能力。」¹³⁾

(2) ギムナジウム各学年段階の学習領域の構成、各領域ごとの時間配分の基準値

ザクセン州ギムナジウムの芸術教科カリキュラムでは、各学年段階で取り組むテーマ（学年段階でのウエイト、本論では「加重点」と略記）、学習領域の構成、各領域ごとの時間配分の基準値は義務規定とされ、具体的展開に関しては若干のコメントが「示唆」として出されているのみである。細部は教師がフレキシブルに組み立て得るようにされている。

各学年段階で取り組むテーマは以下のように規定されている。また学習領域の構成は、学習領域1、学習領域2、学習領域3、選択義務の学習領域（1、2、3）の四つの単元から構成されている。

具体例を挙げれば、第6～10クラス学年段階、並びに第11、12クラス学年段階では、次の通り提示されている。

・第5クラス学年段階：加重点：「自然と芸術」

- －学習領域1：平面における表現（25時間）
- －学習領域2：立体と空間の表現（15時間）
- －学習領域3：プロセスとしての表現（10時間）
- －選択義務の学習領域：（4時間）
 - ・選択義務1：イラスト
 - ・選択義務2：痕跡の探求
 - ・選択義務3：色彩遊び¹⁴⁾。

・第6クラス学年段階：加重点：「色彩のヴァールール」

- －学習領域1：平面における表現（11時間）
- －学習領域2：立体と空間の表現（8時間）
- －学習領域3：プロセスとしての表現（6時間）
- －選択義務の学習領域：（2時間）
 - ・選択義務1：色彩の実験
 - ・選択義務2：色彩のオブジェ
 - ・選択義務3：皆の絵 Bildfolgen¹⁵⁾。

・第7クラス学年段階：加重点：「明暗の豊かさ」

- －学習領域1：平面における表現（10時間）
- －学習領域2：立体と空間の表現（9時間）
- －学習領域3：プロセスとしての表現（6時間）
- －選択義務の学習領域：（2時間）
 - ・選択義務1：筆書き遊び（ドイツ語）
 - ・選択義務2：光のインスタレーション
 - ・選択義務3：写真の演出¹⁶⁾。

・第8クラス学年段階：加重点：「空間の魅力」

- －学習領域1：平面における表現（9時間）
- －学習領域2：立体と空間の表現（10時間）
- －学習領域3：プロセスとしての表現（6時間）
- －選択義務の学習領域：（2時間）
 - ・選択義務1：自然研究
 - ・選択義務2：従来にはないやり方での表現
 - ・選択義務3：紙の劇場¹⁷⁾。

・第9クラス学年段階：加重点：「材料とテクニクの挑戦」

- －学習領域1：平面における表現（9時間）

- －学習領域2：立体と空間の表現（10時間）

- －学習領域3：プロセスとしての表現（6時間）

- －選択義務の学習領域：（2時間）

- ・選択義務1：コンパイン・ペインティング

- ・選択義務2：共感覚 Synaesthesie

- ・選択義務3：舞台設計 Szenografie¹⁸⁾。

・第10クラス学年段階：加重点：「絵 Bild－動き－プロセス」

- －学習領域1：平面における表現（8時間）

- －学習領域2：立体と空間の表現（6時間）

- －学習領域3：プロセスとしての表現（11時間）

- －選択義務の学習領域：（2時間）

- ・選択義務1：手本と模造

- ・選択義務2：記念碑

- ・選択義務3：デザイン¹⁹⁾。

・第11／12学年段階－基礎コース：加重点：「美術の世界－世界の美術」

- －学習領域1：平面における表現（56時間）

- －学習領域2：立体と空間の表現（20時間）

- －学習領域3：プロセスとしての表現（20時間）

- －選択義務の学習領域：（4時間）

- ・選択義務1：現代芸術

- ・選択義務2：ドクメンテーション

- ・選択義務3：プレゼンテーション

- ・選択義務4：写真の実験²⁰⁾。

・第11／12学年段階－発展段階：加重点：「美術の世界－世界の美術」

- －学習領域1：平面における表現（130時間）

- －学習領域2：立体と空間の表現（60時間）

- －学習領域3：プロセスとしての表現（50時間）

- －選択義務の学習領域：（10時間）

- ・選択義務1：インタラクション（新しい成果を得る相互作用）

- ・選択義務2：建築

- ・選択義務3：自由彫塑

- ・選択義務4：コンセプト芸術²¹⁾。

3. ドイツ芸術教育と授業実践の特徴的断面

(1) 調査場所：ドレスデン市、並びに同市近郊：

ドレスデン市では、筆者の知人、元ドレスデン工科大学教授、アドルフ・ベリッヒ Adolf Boehelich 氏（ハンブルク芸術教育運動の研究者²²⁾、並びに芸術教育学者、画家²³⁾）を手掛かりに学校訪問を計画した。同氏は、教え子ハインツ・フェルベルト Heinz Ferbert 氏を、同市中等学校の授業視察依頼・ガイド役に紹介してくれた。

ドレスデン市ギムナジウム・インターン教員（レフェレンダー）研修施設24講師を務めるフェルベルト先生ガイドの下、最初にドレスデン市中等学校教員養成施設を訪問した（2015. 1. 20）後、以下の中等学校を順に訪問した。

（図版による解説①：図1. 2 於ドレスデン市中等学校インターン教員養成施設、参照。）

1) ヴェルナー・フォン・ジーメンス・ギムナジウム²⁵⁾ (2015.



図1：ドレスデン市中等学校教員養成施設にて：アンネグレート・ランクワルト先生と教員研修生

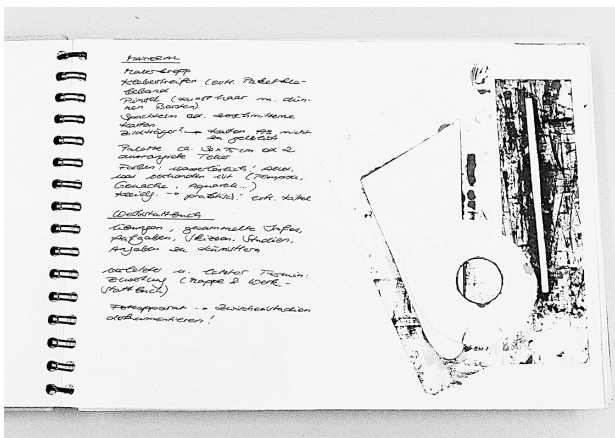


図2：教員研修生の取り組み姿勢を物語る几帳面なノート（ドレスデン市中等学校教員養成施設にて）

1.20)：同校はザクセン州マイセン市近郊、グロッセンハインにあり、フェルベルト先生の勤務校。残念ながら学期末で芸術の授業は終了していた為、フェルベルト先生の授業を見ることはできなかったが、同氏授業時の生徒作品を拝見することができた。同



図3：ハインツ・フェルベルト先生授業の生徒作品

氏は、旧東ドイツの芸術界に育ち、具象芸術家として活躍した後、抽象表現に取り組んできた芸術家でもある。授業でも生徒達に具象画制作と抽象表現を等価知的に評価する姿勢で授業に取り組んでいた（図3，12-16参照）。

（図版による解説②：図3（於ヴェルナー・V・ジーマンズギムナジウム）参照。）

2) ドレスデン市ベルトルト・ブレヒト・ギムナジウム³⁶⁾ (2015. 1.21-22)：

同校はドレスデン市中心部ロツツイン街にあり、ドレスデンの中心的中等学校の一つ。同校では、ウーテ・シェーレンベルク Ute Schellenberg、バルバラ・ティーレ Barbara Thiele、ペギィ・フェッター Peggy Vetter という三人の女性教師の授業を見学した。

ウーテ・シェーレンベルク先生の授業は、同校訪問初日の早朝、第6学年生を対象に始められた魅力的な授業であった（1.21, 8:30-9:15a.m.）。同授業では、生徒達を造形芸術上の近代を踏まえた近・現代的水彩の基礎表現にガイドしていた（図4-5参照）。

またバルバラ・ティーレ先生の授業は、同校訪問初日のお昼から、第7学年生を対象に始められた、少し表現テクニックが要請される授業（1.21, 8:30-9:15a.m.）。同授業では、様々な「線」を用いて、生徒達を、自分のオリジナルな地平の表現へ跳躍させる為の「足場」獲得へ向かう造形表現にガイドした（図6-8参照）。

更に訪問二日目の早朝には、早朝からペギィ・フェッター先生の水彩表現の基礎導入の授業があった。対象は、第6学年生で、水彩による風景の空気感を表現する授業であった（1.22, 8:25-9:10a.m.）。水彩と版画の得意なペギィ・フェッター先生の次の授業は、第11学年生対象の基礎コース Grundkurs の授業であった。同授業では、第11学年生の生徒達に、版画の刷りを使って自分の



図4、図5：シェーレンベルク先生の水彩表現授業、生徒作品
バルバラ・ティーレ先生：

オリジナルな表現を追求する探求活動にガイドしていた（1.22, 10:25-11:55a.m.）（図9-11参照）。

（図版による解説③：図4-11（於ベルトルト・ブレヒト・ギムナジウム）参照。）



左：図6：バルバラ・ティーレ先生の造形表現授業風景
右：図7：ティーレ先生の授業で生徒はペン、竹ペン等の道具に触れる

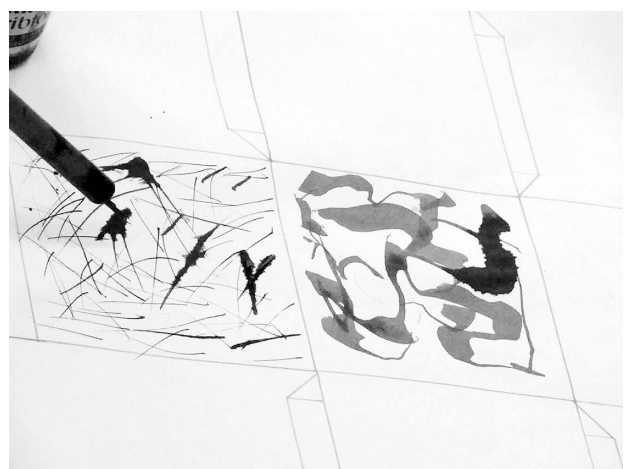


図8：ティーレ先生授業、線の探求表現



図9、図10：ベギィ・フェッター先生の水彩表現授業と生徒の作品

3）ラーデボイル Radebeul、マリー・ルイーゼ財団ギムナジウム 27（2015. 1. 23）：

同校はドレスデン市西隣ラーデボイル、ユージェント・シュトラ

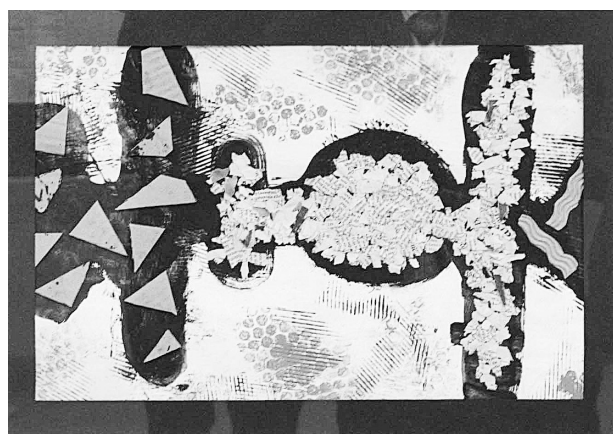


図11：フェッター先生の版画表現授業の生徒作品

セ3番にあり、ザクセン州の魅力的なギムナジウムの一つ。同校では、アンネ・ハイケ・ヘルトランプ Anne Heike Hertrampf 先生の、12学年生対象の基礎造形コースの斬新な実践を見学した（1.23, 11:10-13:40）。フェルベルト先生お勧めであった、ヘルトランプ先生の授業は、ドイツ近・現代芸術のスピリットを受け継ぎながら、造形表現の魅力を生徒達に体験させ、同時に彼等の探究心を開花させようとする「基礎造形」の授業であった。ドレスデン教育界における新しい風を感じることができた。

（図版による解説④：図12、21-26マリー・ルイーゼ財団ギムナジウム）参照。）



図12：ハイケ・ヘルトランプ先生の基礎造形、立体的授業風景

4. ザクセン州中等教育教科「芸術」にみられるカリキュラム構成・開発上の特徴的な諸断面

（1）ドレスデン市中等学校教員養成施設指導講師に見る授業実践と教育課程展開の取り組みとしての学期末「学校祭」

1）ハインツ・フェルベルト先生の授業実践：

フェルベルト先生授業の生徒諸作品は、ドレスデン市ギムナジウム教員インターン研修施設講師を務める同先生がどのような教授方法と授業を編成し得ているか、間接的に見せてくれる。以下はその代表的な生徒・学生作品連鎖であるが、材料・素材を扱い、単純な行為を手がかりとした素朴な導入から始まる。その後、絵の具材料、色彩材料、水彩材料の経験を手掛かりとした絵画表現活動を経て、針金材料、プラスチック材料を使った「造形」の表現へ向かっていく。

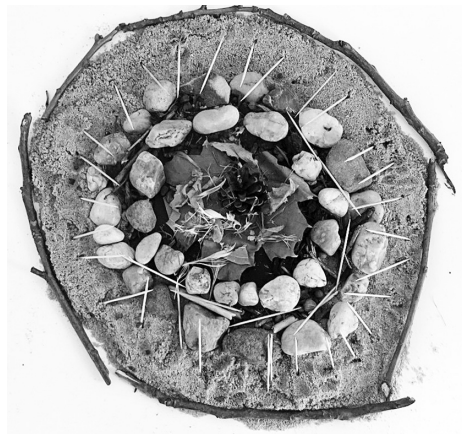


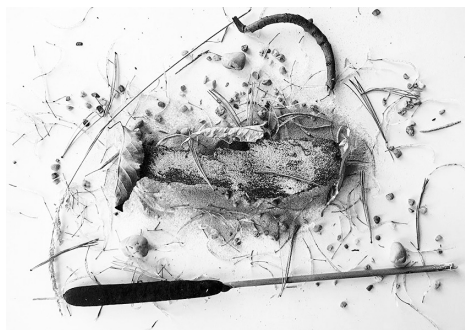
図17：フェルベルト先生、2015／16年、生徒作品、テーマ：大地の芸術。



図18：フェルベルト先生指導の「自画像」の生徒作品

左・右：図13、14：フェルベルト先生、2015／16年、導入授業生徒作品、ブーケ

（図版による解説⑤：図13－19（フェルベルト先生、2015／16年、導入授業）参照。）



上・下：図15、図16：フェルベルト先生、2015／16年、生徒作品、テーマ：大地の芸術。



図19：フェルベルト先生指導針金の立体生徒作品



図20：フェルベルト先生指導の針金の立体作品



図23：アンネ先生の基礎造形、立体の学生作品

2) アンネ・ハイケ・ヘルトランプ先生の授業実践：

アンネ先生の授業科目「基礎造形」における単元「彫刻」では、「立体の表現」が追求された。教授＝学習内容は古典的な意味での彫刻ではなく、バウハウスの材料を手掛かりに「自分自身の空間造形〔表現〕」を追求していく。技術や作品の「完成度」に価値を置くのではなく、自分自身の「立体・空間の構築性」を構成し、創造することが目指された（図20－25、参照）。

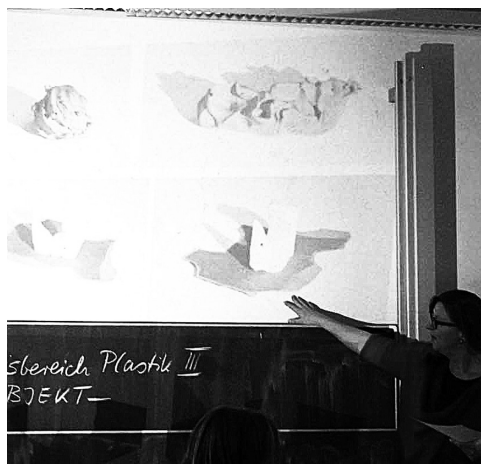


図21：アンネ先生の基礎造形、立体の授業、導入風景



図24：アンネ先生の基礎造形、立体の学生作品



図22：アンネ先生の基礎造形、立体の学生作品

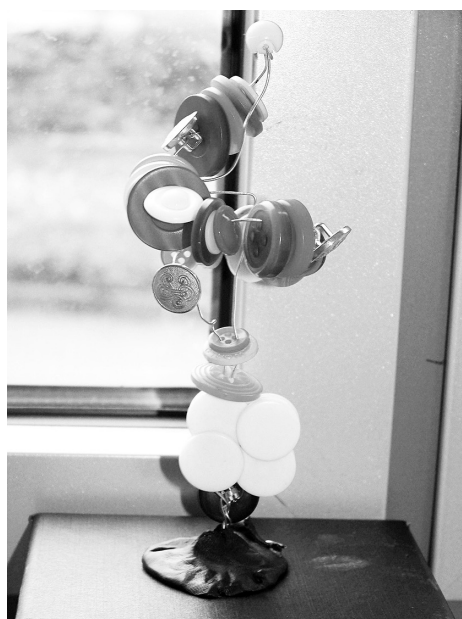


図25：アンネ先生の基礎造形、立体の学生作品



図26：アンネ先生の基礎造形、立体の学生作品

3) 教育課程展開の取り組みとしての学期末「学校祭」：ドレスデン市ベルトルト＝ブレヒト・ギムナジウムの学期末学校祭：



図27：ブレヒト・ギムナジウムの学校祭レセプション・セレモニー

2015年1月24日は、いわば保護者、家族、卒業生等が訪問する学校祭の日であり、生徒達の各教科にわたる学習成果や探究成果が公開された（10：00－12：30）。多彩な作品を通して、同ギムナジウムが、芸術系教育に傾注している「自負」と同教育の多様な展開を創り上げたいとの「抱負」が提示された²⁸⁾。そこには、旧東ドイツ以来受け継いできたドイツの人文系諸科学への愛情や正統派的な具象絵画の芸術遺産を受け継ぎながらも、それを乗り越え、ヨーロッパのバカロレア認定中等学校たらんとするより新しい表現の教育への転換の模索を見ることができた（図27－34、参



図28：学校祭のレセプション・コーラス

照）。

図版による解説⑥：ベルトルト・ブレヒト・ギムナジウムの学校祭：



上2点：図29、30：ブレヒト・ギムナジウムの教科「芸術」の教育・学習活動報告展覧会

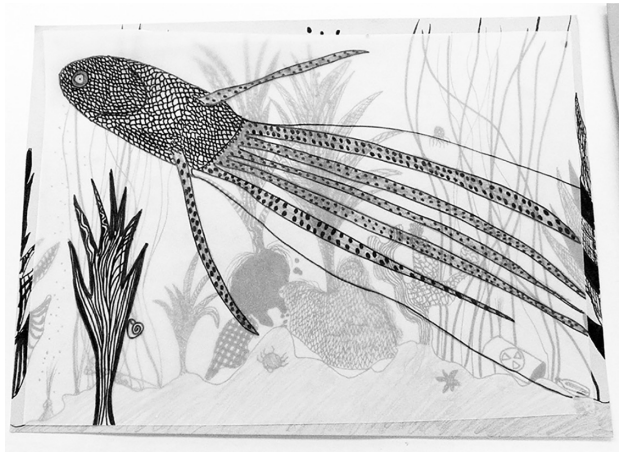


図31、32：ブレヒト・ギムナジウム学校祭展覧会における教科「芸術」の学生作品報告



図33：プレヒト・ギムナジウム学校祭展覧会における教科「芸術」の学生作品報告

図34：プレヒト・ギムナジウム学校祭の一齣：教育・学習活動報告展覧会を見た後、休憩室で休む見学者たち

4) ザクセン州中等教育教科「芸術」カリキュラムの一般的目標：

上に見たように、同州「芸術」のレールプランでは、低学年の授業において<「自然と芸術」－「色彩のヴァール」－「明暗の豊かさ」>が基本的な教授＝学習内容であり、それらが探求的に学習された後、中学年の授業において<「空間の魅力」－「材料とテクニックの挑戦」－「絵 Bild－動き－プロセス」>が探求的に学習される。

同カリキュラム（レールプラン）では、この一連の体験的・活動的理解・獲得を通して、美術コンピテンツの学習が追求される。同カリキュラムでは、教科の一般的目標は以下のように規定されている。

「生徒達は以下の事柄を獲得し、又は発展させる。

- ・芸術的創造過程、並びに受容過程の独自性、ないしは複合性に造形的－実践的に親しむことについての知識と能力、
- ・造形芸術の個人的な表現可能性と造形表現可能性に親しむ中で形作られる美術コンピテンツ Bildkompetenz、
- ・芸術的メディア、テクニック、造形表現方法に親しむ中で形作られるメディア・コンピテンツ、
- ・造形芸術と日常美学に親しむ中で形作られる判断能力。」²⁹⁾

5. ドイツにおける近・現代芸術と造形芸術上の遺産について

(1) ドイツにみる芸術的・芸術教育学的思考の一般的傾向

1) 一般的にドイツ語圏の人々には、物事を動態や関係性として思考する傾向が比較的強くみられる。この思考傾向は、豊富な動詞を起点とした思考傾向と繋がっているように思われる。同傾向は、「諸現象」の関係動態を省察するヨーロッパ的思考形式と同様に、多くの若者が幼少時期から慣れ親しむ思惟形式でもある。

芸術の展開の上で、上記思惟形式は造形芸術上重要な役割を果たしてきた。私たちはその代表的な事例として、クレーやバウハウスの「造形的思考」をあげることができる。同「造形的思考」は、デザイン・建築の領域ばかりでなく、クレーやカンディンスキー達の貢献に見られるように、抽象芸術の領域で「造形的コンポジション（作曲法）」の視点とアプローチを創り上げてきた。

2) 造形芸術分野の場合、芸術諸現象を動態として思考する傾向は、芸術教育を力動的関係として把握する理解をもたらした。

芸術教育学の理論史の中では、例えばベルリン教育圏出身で、ハンブルク大学副学長を務めたG・オットーによる、教育をプロセスとして把握する視点、芸術教育の基本的特徴を「授業における過程としての芸術」として把握する視点、芸術教育における制作過程を<材料・素材－実験－組み立てること Montage>と把握する視点が代表例としてある。しかし、このオットーの遺産も、元々単なるアカデミズムの理論であるのではなく、芸術家・芸術教育実践家が切り開いた芸術教育学の遺産の「結晶化」であった。その人物とは、彼の友人で、ベルリン王立美術学校出身の画家・芸術教育学者であった、R・プフェニヒ（1914－1991）で、彼によってもたらされた遺産によって1960年代のドイツ芸術教育学とその発想構造が確立された³⁰⁾。

(2) ドイツにおける20世紀現代芸術とその造形芸術上の遺産について

1) ベルリン国立芸術学校出身教授による分析的・構築的な現代的芸術教育学の伝統：

1930年代初頭にベルリン芸術大学前身を卒業したR・プフェニヒは、芸術史の研究を糸口に、芸術家修業の世界に入り、1948年から50年代にかけてニーダーザクセン州オルデンブルク大学で教職に就いた。60年代には、第二次世界大戦後の芸術教育学研究のパイオニアとなった。

当初、彼は初期著作で次のような基本的概念を基礎づけようとした³¹⁾。

空間を創造する可能性（1959）／生き生きとした動き Beweglichkeit（同）／動的なバランス、動的なコンビネーション（同）／空間的力動性（同）／色彩的に動きのある光の空間（同）／「空間、運動、光、並びに色彩」からなる構成物（同）／作用する作品〔絵画〕空間（同）／構造的な作用が発生する（同）。

プフェニヒは、その後の1964年、その著書『造形芸術の現代——造形的思考への教育』で、自らの芸術教育学の視点の凝縮的な部分を、次のように要約した³²⁾。

「偶然性を、…制作の意志決定の中に差し挟もうとする…ことによって、予感もしなかった豊かさが生み出されてくる。それ故に我々は、材料を、その材料がアクティブになるように制作に振り向け、…活用する」と。

「…作品とその発生過程は、共通の構造を有している。造形的思考はその際、変化するこの影響に対して、絶えず反応する中で生まれてくる諸力を知覚し、それら諸力を導き、秩序づけることである。この発生過程の中に…相互変化と造形表現との対話が反映され、その対話の中にこそ現代芸術の教育（学）的意味が明らかとなる」と。

彼はこの視点から、制作・表現が《動きのある空間》によって《生き生きとした空間》を生み出すことにあることを明らかにした。最終的に彼は次のような芸術教育学的視点を学問的論理として提出した³³⁾。

－「固定的な空間が、…動きのある空間に変わると、今や自律的な表現手段との格闘が始まる」。

－「この学習過程は、思考の中に変化を、それ故に人間の中に変化を引き起こす。」³⁴⁾

2) ドレスデン芸術アカデミー芸術家にみる造形芸術上の遺産と芸術教育学的刺激：

今ここで、ドレスデンにおける戦後芸術界に目を向けたい。

日本に例えれば「京都」に類する、古都ドレスデンの具象芸術家の事例は、比較的古いタイプの芸術アカデミーのスタイルを維持してきた、1960年代迄のデュッセルドルフ、ミュンヘンの事例を想起させてくれる。

しかし、例えばドレスデンの芸術家ハンス・テオ・リヒター（1902－1969、元芸術アカデミー教授）、具象水彩画家・芸術教育学者アドルフ・ペーリッヒ（1933－、元教育大学・工科大学教授）達は、1950－60年代と1990－2000年代、抽象の視点を取り入れることによって具象芸術の表現世界を拡大した³⁵⁾。受け継がれた視点は、「造形的作曲法としての美術の表現」と言い表わせるもので、その仕事を通して具象における表現世界が現代アートとして拡大された。そしてまた、次のような芸術教育学的視点がもたらされた。①「クロマータッシュな（chromatisch 半音階・色彩の、濃淡の）」もの、というヨーロッパ芸術界の伝統的な視点の体験、並びに②ドレスデンの巨匠芸術家ハンス・テオ・リヒターによって切り開かれたリトグラフのアプローチ（「空間の芸術」による具象芸術の拡大）、そして③<テクスチャーによって空間を生み出す>という、同じくドレスデンの芸術家・芸術学者アドルフ・ペーリッヒ元教授の視点³⁶⁾。

そのいずれも、本来きわめて古典的なカテゴリーに属するものであるが、これらの視点を受け継ぎながらも、現代表現を開花させることによって「行き詰まり」つつある旧東ドイツ由来の、現代造形表現と表現教育の地平に飛躍の窓が開けられた。明らかにされたのは、「空間の力動性」へ至るパッサージュであった³⁷⁾（⑥参照）。

おわりに

本研究の課題がグローバリゼーションの下で現代表現教育の諸相の解明にあるとはいえ、研究が「深まる」ことは簡単ではない。

しかし本論では、それら三つの諸相を重ね合わせることによって、わが国の表現教育関係者、表現教育研究者がイメージできなかった「美術教育界」実情の一端を解明できればと考えた。この「界」のイメージは、筆者も含め、これ迄誰も見ることができな

かった世界であった。

註

- 1：共同科研「美術デジタル教科書の利活用における現状と課題」（領域番号：25285248、研究代表者：安東恭一郎（元香川大学教授、2016年2月没）、研究期間：2013－2015）
- 2：Lehrplan Gymnasium, Kunst. Saechsisches. Staatsministerium fuer Kunst und Sport, 2004
- 3：Ibid. S.2.
- 4：Ibid. S.2.
- 5：Ibid. S.2.
- 6：Ibid. S.XIII.
- 7：Ibid. S.5.
- 8：Ibid. S.10.
- 9：Ibid. S.13.
- 10：Ibid. S.16.
- 11：Ibid. S.19.
- 12：Ibid. S.19.
- 13：Ibid. S.2.
- 14：Ibid. S.5.
- 15：Ibid. S.5.
- 16：Ibid. S.5.
- 17：Ibid. S.5.
- 18：Ibid. S.5.
- 19：Ibid. S.6.
- 20：Ibid. S.6.
- 21：Ibid. S.6.
- 22：Adolf Boehlich:
- 23：アドルフ・ペーリッヒ、鈴木幹雄著『造形的作曲法としての美術の表現』NPO 瑞浪芸術館、2011年、参照。
- 24：ドレスデン市中等学校インターン教員養成施設（Höheres Lehramt an Gymnasien, Dresden）：Vgl.: HP, URL: <<http://lehrerbildung.sachsen.de/8710.htm>> 参照。
- 25：Werner-von-Giemens-Gymnasium, Grossenhain: Vgl.: HP, URL:< <http://www.gymnasium-grossenhain.de/sammelordner/startseite/>>
- 26：Bertold Brecht Gymnasium, Dresden: Vgl.: URL:<<https://cms.sachsen.schule/bebe/willkommen/home/>>
- 27：Marie-Luise Stift Gymnasium Radebeul: Vgl.: URL: <<http://www.luisenstift.de/>>
- 28：Vgl.: Bertold Brecht Gymnasium Jahrbuch 2014/15. Und auch, “Begegnung. Kunstausstellung HOGA-CSD- Bertold Brecht Gymnasium”, op. cit. S.58-61.
- 29：Lehrplan Gymnasium, Kunst. Saechsisches. S.2.
- 30：拙稿「現代ドイツ芸術教育学成立期にみる芸術教育学の表層面と実際—1960年代芸術教育学はいかに創られたか、我々はそこからどのような芸術教育学理解を学ぶことができるのか—」、美術科教育学会誌『美術教育学』第35号、2014年、pp.305－314、参照。
- 31：拙稿「ベルリン国立芸術学校出身教授R・プフェニッヒによ

る分析的・構築的な現代的芸術教育学の模索—1950—60年代オルデンブルク大学における芸術教育学研究の足跡を手掛かりとして—」、『神戸大学人間発達環境学研究科紀要』第1巻第2号、2008年、pp.105—112、参照。

32：同上、参照。

33：同上、参照。

34：同上、並びに拙稿「現代ドイツ芸術教育学成立期にみる芸術教育学の表層面と実際」、参照。

35：アドルフ・ベーリッヒ、鈴木幹雄著『造形的作曲法としての美術の表現』、『本書の背景・造形表現理解 解説』参照。

36：アドルフ・ベーリッヒ、鈴木幹雄著『造形的作曲法としての美術の表現』、参照。

37：拙稿「現代ドイツ芸術教育学成立期にみる芸術教育学の表層面と実際」、参照。

参考文献

- ① Lehrplan Gymnasium, Kunst. Saechsische Staatsministerium fuer Kunst und Sport, 2004.
- ② Bertold-Brecht-Gymnasium. Jahrbuch 2014/15.
- ③ 拙稿「現代的要請と芸術教育学の遺産とのはざまに位置する図工・美術系カリキュラムについて [副題—略]」、『神戸大学大学院人間発達環境学研究科紀要』第4巻第2号、2011年。
- ④ 拙稿『『空間を動かす』感動を模索する』（2011年大学美術教育学会発表レジュメ）
- ⑤ 拙稿「ベルリン国立芸術学校出身教授R・ブフェニッヒによる分析的・構築的な現代的芸術教育学の模索—1950—60年代オルデンブルク大学における芸術教育学研究の足跡を手掛かりとして—」、『神戸大学人間発達環境学研究科紀要』第1巻第2号、2008年
- ⑥ 拙稿「現代ドイツ芸術教育学成立期にみる芸術教育学の表層面と実際」、『美術教育学』第35号、2014年。
- ⑦ アドルフ・ベーリッヒ・鈴木幹雄著『造形的作曲法としての美術の表現—ドレスデン芸術アカデミーの息吹と精神』NPO 瑞浪美術館、2011年。

謝辞：本論調査にあたり、ハインツ・フェルベルト氏、アドルフ・ベーリッヒ教授、Ms. アンネグレート・ランクヴルト氏、Ms. バルバラ・ティーレ氏、Ms. ウーテ・シェーレンベルク氏、Ms. ベギー・フェター氏、Ms. アンネ・ヘルトランプ氏には大変お世話になりました。ここに、お礼申し上げます。
(I thank here German specialists in Dresden and around Dresden for heir kind big information for my research 2015-2016 of this paper. Prof. Dr. Adolf Boehlich, Mr. Heinz Ferbert, Ms. Annegrete Langwald, Ms. Barbara Thiele, Ms. Uthe Schllenberg and Ms. Anne Heike Hertrampf contributed for my research work of this paper.)

〔本研究は、共同科研の平成26年度の成果（共同科研：研究題目：シュトゥットガルトにおける芸術アカデミー改革とヘルツェル学派の改革的伝統（研究種目：基盤研究（C）、課題番号：

25381028、研究分担者・研究協力者：鈴木幹雄、清水光二、長谷川哲哉、研究期間：平成25—27年度）〕である。〕